

# どこまで壊せば気がすむのか ——自然破壊の現状・ 南アルプス北部の場合——

山村正光



野呂川林道終点付近  
山側をけずり、ズリを谷底に落とす。  
すでに、しま枯れ現象が起きている。

南アルプスの原生林の中を東西に横断する南ア・スパー林道は、着工以来十年の歳月をへた。全長五六・六三キロのうち、北沢峠をはさんだ一・五六キロを残し

て工事はストップされている。この林道に一步でも足をふみ入ると、地元の南信日々新聞、52年7月19日号は次のように報じて

「尾勝谷の大崩落の跡が見えてきた。(中略)その崩落の跡のすさまじさは一瞬息をのませる程の規模。下界の道路では考えられないほどの崩落ぶりである。」

さらにその奥地について、「崩落箇所は尾勝谷ばかりではなく、地質の悪い国立公園内の唐沢地籍でも幅四百メートルの間に数ヶ所あった。さらに奥地の藪沢地籍には林道の下に長さ六、七百メートルに達する自然崩落があり、上部にも三十ヘクタールに及ぶ自然崩落が認められ、すさまじい自然の破壊力を示していた」と。

さて、山梨県側、野呂川の支流北沢はどうだろうか。昔、明治十五年この沢をくだったのは横山又次郎博士ら。その後木暮理太郎氏は明治三十年。大正に入ると十四年三月の京都三高の西堀栄三郎氏ら。時を同じくこの沢をさかのぼった平賀文男氏は「雪に閉じ込め

られた坑道のような陰惨なこの峡谷」と記録しておられる。それが、現在では下雪投沢まで林道は完成し、谷底までズリをおとしこみ、見るかげもない浅い谷となってしまうている。

左岸沿いに樹林帯をくだって一三峯岳から馬鹿尾根をくだり、両股小屋に出た。小屋は普通通りですこしはかわっていなかった。

まあ、この南ア・スパー林道については、この数年、自然保護の観点から何回も有識者によってとりあげられてきたが、問題は北沢橋から野呂川左岸につけられている林道である。一般立入り禁止になっているので、どこまで続いているのか、何の目的か、深いベールに包まれていた。今夏、意を決し、この足で探ってみた。



昭和52年(1977年)  
11月号(No.389)  
社団法人 日本山岳会  
(J.A.C.)  
定価一部 150円

目次

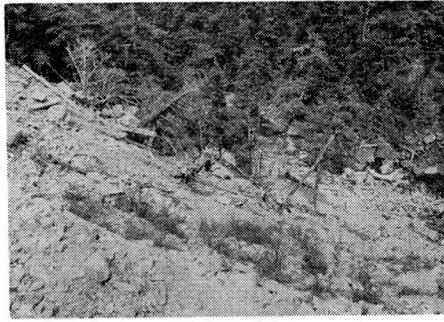
- どこまで壊せば気がすむのか  
——自然破壊の現状・南アルプス  
北部の場合——(山村正光) ……(1)
- 山を歩く  
栗山郷の明神岳(川崎精雄) ……(2)
- 愉しかりしペテガリ岳登山  
(井手貢夫) ……(3)
- スイスのエーデルワイスを訪ねる  
アルパイン・ツアー  
——スイス山岳会との交歓会報告——  
(坂倉登喜子) ……(3)
- 藤島敏男さんのこと  
(小野 幸) ……(4)
- ルーム基金のお礼とお願ひ  
ルーム基金応募者ご芳名 ……(5)
- 図書紹介 ……(6)
- スイス・アルプス風土記  
ヒマラヤ  
思い出の山々  
積雪期における穂高岳奥又白谷  
四峰側壁の初登攀  
——永井憲治氏の手記より—— ……(6)
- 支部だより——関西支部 ……(8)
- 報告とお知らせ ……(8)
- 図書受入報告(2) ……(9)
- 会務報告・ルーム日誌・会員動向 ……(11)

カット/松本慎太郎

五分。あつと驚いた。河原にブルドーザーの入った跡があるのだ。そして、左岸の崩落に土留工事が施され、「保安施設地区指定地」なる標柱が建てられていた。この直前まで林道がつくられていた。

山をきれいに コミは持ち帰ろう

野呂川林道終点近くの林道直下  
低価格で林道をつくるので、ズリを谷  
底へ落とすだけだ。下の沢は野呂川。



底におとししてしまう。なきたおさ  
れた巨木は、肌をあらわに、はる  
か下から響く瀬音は、木の生命の  
悲鳴か、はたまた山霊の呪詛の叫  
びか、およそ鎮魂の折りとは聞く  
ことができなかった。眼をおおわ  
んばかりとは実にこのことだ。  
道路沿いに飯場が点在し、前白  
根沢の出合いでは、谷底にユンポ  
がうなり、削岩機がはげしい音を  
たて、ブルドーザーが牙をむいて  
ほえたてていた。これを見おろす  
かたちの北岳は、どのような思い  
でそびえているのだろうか。  
やがて、大仙丈沢の出合いにむ  
けて林道は大きくカーブした。大  
仙丈沢には、大きな堰堤が三つも  
できており、ゆるやかな草つきの

沢筋が稜線につきあげていた。

このような荒っぽい工事を誰が  
許可したのだろうか。治水、治山  
の錦の御旗の下なら何をやらか  
してもよいのか。はげしいいきどお  
りさえ覚えた。自然保護について  
個人のモラルに訴えることは大事  
だ。それとともに、行政サイドに  
よる大量破壊にも眼をむける必要  
もありはしないか。

例えば悪いが、個人が人を殺せ  
ば殺人罪、天皇の名により大量殺  
戮すれば金鵄勲章、こんな思いが  
ふっと脳裏をかすめた。

話かわって、今夏より、北岳稜  
線小屋の脇に大ヒュッテが山梨県  
の手で建設中である。白峯三千メ  
ートルの稜線にブルドーザーをあ  
げ、お花畑、道松帯をつぶし、岩  
稜をならし、コンクリートを打ち  
こんでいる。三百人収容の水洗便  
所つぎとのこと。でも汚水はどの  
ように処理されるのだろうか。

上高地に、あのちいさな山研を  
建てるについて、おかみはどんな  
にうるさいことをいったか、建設  
の衝にあたった会員の方々の御苦  
労話をたくさん聞かされている者  
にとつて、この北岳をめぐる大量  
破壊は何としても腑におちない。  
一人でも多くの会員の皆様が現  
地を訪ねて、そのすさまじい破壊  
の実態を眼にしてほしい。このこ  
とをふまえて、もう一度、自然保  
護とは一体何かと、共に語り合っ  
てみたいものである。

山を歩く

栗山郷の明神岳

川崎 精雄

日光の奥の、栗山郷と湯西川温  
泉の間にある明神岳(二五九四m)  
へ昔から登りたいと思っていた  
が、急に誘われて山田哲郎、中西  
章両会員ほか三名と出かけたの  
は、一九七七年四月十六日の午後  
である(東京から車で出発)。

夜桜の美しい鬼怒川温泉を横目  
に、五十里ダムに着いて車中で睡  
眠をとる。訓練のため車外で眠  
た者二名。早朝起きて、湯西川手  
前の一ツ石の民宿に着いて、朝食  
の支度をしながら登路を尋ねる  
と、地図に栗山沢と名のある沢を  
辿って、最後は藪こぎになるとい  
う。民宿の主人がこの沢のことを  
イノ沢と発音するので、湯ノ沢の  
訛りかと思ったら、猪ノ沢だと訂  
正してくれた。

明神岳は一九六六年三月に登る  
つもりで、故藤島敏男、故村尾金  
夫、佐藤勉三氏と湯西川に一泊し  
たが、その夜からの大雪で空しく  
帰った思い出がある。それから早  
くも丸八年経った。その時は湯西  
川から前沢を登って北西面から取  
付くつもりだった。前沢の奥まで  
林道が入っているが、今回は東北  
面から取付くことにした。

昨夜からの雨雲は消えて、快晴  
である。往復だから荷物不要だ  
し、私はカメラだけの楽な山登  
りとなった。沢は入口を少しゆく  
と、ゴルジュ状になる。幸い雪が  
消えていて岩のへりを伝わって登  
れたが、残雪が崩れそうな時は、  
通過に苦労させられそう。春で  
あり、雨後でもあるので水量があ  
った。潮り易いのは秋であろう。  
左岸に小滝をつらねて落ちてく  
る沢も目を惹く。ゴルジュ地帯を  
過ぎると沢は幾すじにも流れてい  
て、右に左に石を伝わって越え  
る。沢が二分する所で明神岳の全  
容が仰がれた。頂上を中心にし  
て、北峰と南峰が並び、此方に落  
ちる沢の上部に残雪が白い。沢を  
離れて、南峰に達する尾根を登  
る。何年か前に尾根の下の一部分  
を伐採した時の径が残っていて、  
途中までは楽だった。しかし尾根  
の上半分は完全な藪で、先頭の中  
西君は切払いをやり、最後のG君  
は赤テープを枝に結んで前進し  
た。

雪と藪の急登を続け、一五〇〇  
mの南峰の上に出たのは十一時半  
で、沢の入口から四時間を費して  
いた。ここに明神の小祠があった

(頂上にはなし)。南側の栗山郷の  
人たちが、年一回とか此処まで参  
詣に匍匐上ってくるとかである。  
南方の谷々を越えて、赤難山、  
女峰山、真名子両山が雪の北面を  
見せ、離れた所に白根山も見え  
る。逆に北を望むと、近い所に荒  
海山、それに重なって七ヶ岳。遠  
く磐梯山が座り、吾妻連峰が霞ん  
でいる。右手に那須や二岐の諸  
山、それに大佐飛山などが並んで  
いた。  
頂上へは、約一〇〇mのくびれ  
を一たん下って、登りなおさなけ  
ればならなかった。笹と木と雪の  
中を歩いて頂上着午後零時半だっ  
た。木々の間からこの次に来る枯  
木山のルートを検討し、ゆっくり  
休んだ。田代山と帝釈山の先に真  
白なのは、会津駒から三ツ岩へし  
稜線で、少し遠いのは窓明山らし  
い。大木の根に登って撮影した。  
一時間程堪能して、往路を戻っ  
た。北峰を経て、溯った沢の西側  
の尾根を下るうかと話し合った  
が、沢へ落ちる最後の部分が悪そ  
うなので、やめた。  
南峰から下る時、しぜん右へ  
寄りすぎて、高土山(二二〇〇m)  
へ続く尾根へ入りそうになった  
が、先刻付けた赤テープが物をい  
った。何となく右へ寄りたくなる  
藪の中の地点である。  
麓へ戻ったのが三時半。湯西川  
の共同風呂まで車を飛ばして、汗  
を洗い流し、肌着を更えて帰路に

ついた。雌ビールとジュースに湯をいやしなから。  
△私の地図(大正元年測、昭和五年修正)には明神岳とあるが、昭

山を歩く

愉しかりしペテガリ岳登山

井手 貢夫

和五十年図には、明神ケ岳となっている。同様に燧岳も最近は燧ケ岳となっている。▽

七月の中旬に北海道支部から通知が来て、八月中旬に日高のペテガリ岳へ行くから参加しないかという。昭和十五年の冬、北大山岳部の一行が遭難した有名な山だが、ペテガリ川の上流に山小屋ができて、今はずいぶんらくに登れるらしい。それでも途中で一泊キャンプをするという。行きたいが、キャンプをするとなると、荷物が大変だ。まだまだ若い積りだが、荷物だけはこたえる。だれか若い人を連れて行かねばなるまいか、と聞きあわせると、できるだけ身軽で来て欲しいと、これはまた嬉しい返事である。  
八月十二日(金)、平野君の運転する車に山川さんたちと同乗して夕刻新冠のユートピア牧場着。ここで一行勢ぞろいということ、女性軍は夜到着、大塚支部長、新妻君一家の一行は、翌早朝に着いた。  
ここで新冠のユートピア牧場のことを少し説明しなくてはならない。明年の日本山岳会のペテガリ

行にやはり集合地となることだろうが、南に六十六万坪の牧場が、広々と丘の斜面を見せて展開する眺めは、スコットランドでも思わせるような、バタクさい風景である。それを眺めわたす高台に、約六十名が宿泊できるなかなかしゃれた建物がある。この夕食がまたすばらしい。部厚な実とうまい牛肉のステーキ、それも自分で好みに焼いて、アルコールはみなそれぞれにスコッチはもとより、フランスのナポレオンまでとびだしてなんともよい気持である。好きな人は生肉を舌打ちならして食べている。若い人たちはストーブを囲んで、飲みかつ食い、語りあって夜のふけるの知らない。年よりのどもは早々に入浴をすませてベッドに横になる。  
午前八時出発。新冠川ぞいに南下して、万世で左に丘陵を越えて静内川に出る。今度は静内川の右岸を約二十キロ余、この辺は、コイカクシュンベツリ川と名が改まり、道はようやく危なげな断崖を

切り開いた石ころ道で、時々車窓から二〇メートルぐらいい下を流れる水が美しい。この車道の通らぬ前は、この沢をどれほどの苦勞と、またどれほどの感嘆の声をあげつつさかのぼったことだろう。ようやく小屋についたのは十一時、二時間半ほどで約八十キロをドライブしたわけである。  
十一時半に小屋を出発。四〇〇メートルほどの高度から、まず一〇〇メートルほどのこぶまでほとんど一気に登る。午後二時。山川さんたちが先に行ったと思っここまで来たが、どうやら一人先に出たらしい。弁当を食って昼寝をしていたら、やがて重荷を背負ったみなさんが到着。一時雨が降りそうだったが、曇ってこそいるが、心配なさそうだ。  
午後三時出発。四時すぎには全員一二五メートルの台地に着いて、樹間の道なりに天幕を張る。年よりの大塚、山川、兼平、井手の四人は、若い女性四人と十人用の天幕に寝る光榮に浴す。荷物もあっていささか窮屈だったが、このカマボコ型十人用天幕の、堅牢で軽く便利にできているのには感心した。  
四時頃起きる。霧。新妻一家と平野君たちは他の天幕。炊事当番の女性軍は三時には起きて仕度にかかっていた。午前六時半出発。しだいに霧が上がって高曇りとなり、右手にベツピリガイ山、中ノ

岳などがそびえ、頂きに雲のかかったペテガリの左手にルベツネ、ヤオロマップ、そして一八三九メートルの無名峰がじつに立派だ。一二五六メートルから一五〇メートルほど下って、さらに一三〇〇メートルに近いユブを、這松の間の切りわけ道を四周の展望を楽しみながら四つか五つ登ったり下ったりして、ようやく一二〇〇メートルのペテガリの鞍部に達した。どういうわけか、この辺まで私がトツに立たされていたが、この鞍部から一七三六メートルまでの急な登りでは、さすがに元気な連中がじれったくなったのか、私を追い越したので、一休みさせてもらって、今度はしんがりを相手とめる。  
十時頂上着。相かわらず高曇りで、見渡せる限りの山々が見える。遠くカムイエクウチカウシも

見える。神威岳はその名のごとくいかにも立派だ。十時半下りになり、天幕場十三時。昼食三十分。十六時すぎには小屋に着いて、ユートピア牧場は十八時近く。しかしまだ明るい。  
その夜のビースターキのまた格別にうまかったこと。牧場主の向井君からラインワインの差入れさえあった。  
それにしても、めぐまれた楽しい山行だった。高曇りで、暑さをさけることができたのもよかった。来年は六月頃に登山計画があるようだ。小屋から上はまったく水がないので、まだ残雪のある頃にしようというのである。どうか本州から大勢の参加者があってほしい。ユートピア牧場で二、三日静養などというのも、また楽しからずや、である。  
(五二・九・十七)

スイスのエーデルワイスを訪ねるアルパイン・ツアー

——スイス山岳会との交歓会報告——

坂倉 登喜子

今夏は八月十二日より二十五日までの二週間、日本交通公社虎の門支店企画の、ヨーロッパ・アルプス・アルパイン・ツアーに同行して、五〇年来の夢であったスイスのエーデルワイスを、フィンデルン・アルプ付近で見ることで

きた。一九七五年秋にはヒマラヤ・ランタン谷で大群落に出合ったが、今回は本場スイス・アルプスのやや小さい星のまたたきにも似た花を岩場でなく、草原で発見し、ツアーの目的を果たすことができ、参加者一同大喜びであっ

た。  
ベルナー・オーバーランドを朝な夕な仰ぐミューレンは素朴な山の町で、私たちの宿は名前もびつたりの「エーデルワイス」というホテルで、家庭的な雰囲気ですっかり気に入ってしまった。何年か前にJACの先輩方がお泊りになった時のサインを見せられ、みな山のお友だちだと云ったら大喜び、なんとなくつかしい思いがした。

ここで三日間過ごした後、ツェルマットへ移動した翌日、スイス山岳会長他女性を混じえたメンバー三名を宿にお招きして、交歓会を催し、お互いにメンバーを紹介してワインをくみ交し、楽しいひとときを過ごした。バッジの交換やヨーデルやホーンの吹奏があった後、私たちはエーデルワイスの歌や、日本調の歌をうたい、花の本と日本趣味の女性らしいプレゼントをお札に、風呂敷に包んで贈った。  
山ではずっと晴天続きで、ユングフラウ・ヨッホで雪を踏み、フイルスト・パツハゼーでは花の散歩道を歩き、シルトホーンへは名ガイドと楽しく登った。ゴルナーグラード展望台からはモンテ・ローザの白銀の輝きを見、フィンドルン・アルプ付近でエーデルワイスに出合い、マッターホルンのヘルンリ小屋への道で新雪にあった。

帰路はチロルのヨーデルやクラシック音楽を聞き、シヨッピングを楽しむという。盛り沢山でしかものんびりした山麓トレッキングをして花を訪ねるツアーを終った。

総勢三八名の大移動で、そのうち女性が三名、数少ない男性は乗換える時荷物運びで大変だった。力のある女性は男性なみに大



活躍、全員元気にお土産をどっさり買いこんで無事帰国することができた。

今回半数が主婦の参加者で、「思い切って来て良かった。ミューレンで十日間滞在したい……」という声があった。女性も心して努力すれば、スイスへの夢も実現できる時代になったことは喜ばしいことだと思えた。

### 藤島敏男さんのこと

小野 幸

藤島さんは月に一回ぐらいつつわたしのつとめ先へ寄ってください

った時期があった。昭和三十一年から十年余り、それがつづいたのであったが、わたしに会いにこられるというより、第二のおつとめ先、月一回出勤の東京駅前の鉄道会館のとなりで、わたしのつとめ先で、それも一階であり、入口に

申し上げて、ご消息をうかがうことが多くなった。  
藤島さんから、大正時代にラジオ講演をされたものを収録した本が見たいと言われていたが、それが見つかったので、お便りで申しあげた。昭和四十九年の初夏の頃だったろう。早速おはがきをいた

二年六月発行)を郵送申し上げた。  
「ラジオ講座の本、昨日届いた。御心遣奈なし、お礼申上げる。僕の写真は松本支店のとき写したもので、真えるパイプはファミリー・パイプ、三十歳か卅二歳だろう。話の内容、勿論覚えてあいなう、興深く読返した。」  
この本にある内容の題は「隠れたる山岳」で、パイプをくわえておられる写真もある。もうこの頃から避衆登山の話を書いていたのだ。放送日は大正十五年七月十七日とある。  
それからお便りがとどえていたが、十二月に入っていた。夏のはり御殿場から帰京後、思ひがけぬ大病、胃袋2/3切除、百日の滞院から、この十四日に宅へ戻ったばかり。14kgもやせて体力回復に時間がかかるだろうが先きゆきは明るいから乞御安心」

来客用の椅子もあってので、ひと休みのおつもりで寄ってくださいだったのであった。いつも三十分から一時間ほど、最近の避衆登山の戦果を語ってくださいるので、ほんとうに、こられる日待っていたものだ。時にはサービス判に伸ばした写真と、キチンとたたんだ五万の地図(普通よりも一折するののでちいさいたみ方)を広げて説明してくださいるのであった。

「あの小冊子が出てきたとは面白い。題目など勿論おぼえていないが、大正十五年か昭和二年の夏、愛宕山に放送局があった。冷房もなく、雑音の入りぬようにと締め切りで暑かったこと。謝礼が三十円。その中から十八円を投じて、ダンヒルのパイプを買った。臨時収入だから身分不相応な散財をした訳だ。そのパイプは今も手許にある。日銀行員で放送に出たのは恐らく始めて。なにか冷たい目で見られたこと。こんな色々なことを連想する。遠い遙かな過去。当方相変らず至って閑にして健。正月以来七回山谷を訪ねた。この七月廿四日から東京と郵便物を絶縁して御殿場ゆき。」

その頃は、もう亡くなられた田部重治会長、足立源一郎会長、神谷恭会員や川喜田壮太郎会員などもよくのぞいてくださった。  
昭和四十二年からつとめ先が有楽町駅前、ビルの八階に移ってからは、藤島さんは、エレベーターなんてめんどうだ、といわれて、あまり顔を見せていただけなくな

った。その代り、電話やお便りを編『ラヂオ講演運動講座』(昭和

「一日付貴信拝見。久々の面談だったが貴兄お元気で何より。

わたしたちのルームをわたしたちの手で!!

ルーム募金のお礼とお願い

ルーム募金はおかげをもって下記の通り十月十日現在で会員目標額の一千万円を突破致しました。ご応募下さった各位へ改めて厚くお礼申し上げます。ただその内訳を見ますと、金額では東京地区七〇〇万円、地方三七〇万円でありますが、人員では東京地区三二六名に対し地方三〇九名となっており、地方在住の会員諸氏から力強いご支援をいただいたことがわかりました。反面、約一五〇〇名おられる東京地区会員のなかには、まだお申込み下さらない方も少なくないので、口数の多寡を問わず、この際一人でも多くご応募下さいますようお願い致します次第です。

目下財界方面の募金勧誘にと

りかかっています。なかなか難航しております。応募締切は十月末日としておりましたが、諸々の事情を勘案し当分締切ることなく延ばしておりますので、その点もご承知の上今後ともよろしくご支援のほど切に願ひ上げます。

昭和52年10月12日 募金委員長

\*募金払込み期限 昭和52年12月末日

\*振込み先

三和銀行本郷支店 普三五五―一三七六一二  
協和銀行神田支店 普一二六一―五七四五九三  
東京銀行本店 普〇〇〇一―一二五二〇五  
中央信託銀行本店

頂戴の雑誌興深く一覽。メーデーが貴兄訪問、二日は午後望月が慰問来訪、夕刻神宮外苑を、つつじの花盛りを見て歩いた。今日三日はマメリーの本の外函を作ろうとしている。週休七日制が久しいから決して退屈することがない。」

そして昭和五十一年一月のお便りの中にも、

「僕、手術後二度目の正月を無事に迎へた。山はともかく、こ

の調子なら、当分余生楽しめそう。乞御安心。」

と言われておられたが、その後再びご病状悪化、九月九日ご逝去のことを軽井沢滞在中、新聞で知らされたのである。

先日、藤島さんの「山に忘れたパイプ」をひろい読みしていて、「山に忘れたパイプ」の文の「追記」に、お便りのファースト・パイプのことが記されているのに気がついた。

「このファースト・パイプは、その後スイス・アルプスに遊んだときも、いつもポケットにあつて、ずいぶん愛用したものだが、過般の戦中戦後、粗悪なタバコを用いたためか、クラックが入って使用にたえなくなり、いまはもう私の手許にない。」

このパイプにも増して、先輩藤島さんの逝かれたことはほんとうにさみしい。(昭五二・九・一五)

普〇〇一―二四九〇五  
郵便振替口座

名義はいずれも日本山岳会  
東京三―四八二九

\*募金方法  
東京都、神奈川、埼玉、千葉各県に在住される会員は、一口金一万円

その他の地域に在住される会員は、一口金五千円  
いずれも分割払みをお受けします。

ルーム基金応募者  
ご芳名(4)

(昭和52年10月10日現在  
敬称略・順不同)

〔東京の部〕一口一万円 数字は口数

(5) 森川洋佑、林和夫、鈴木本郭之、加藤泰安、交野武一、田村扇一(3)

婦人懇談会、慶応義塾大学山岳部、野口末延、大森弘一郎、小原勝郎、一橋大学山岳部、第2次RCC、田村俊介、崎田照、早稲田大学山岳部

(2) 中川忠實、宮下啓三、山本健一郎、小原晴子、中村光三、沢井政信、滝川清、早川義郎、北島光子、川井歌子(1) 広木孝一、佐藤勉

安藤文子、原田幹市、藤原武夫、山下潔、梅野淑子、川俣俊一、野川初江、井上二男、新井陽一郎、山口滋嗣、直井良徳、森田茂、高頭祥八、池田剛、平柳一郎、城所邦夫、柳宏子、池戸誠二郎、橋爪幸達、G. Way、大木淑子、佐藤亮、川田善朗、谷川菊雄、山本久子、初見一雄、加藤隆、鍵和田洋一、柳沢悟、菅野時子、田島祐一

小計 五九名 一三三〇  
金一、一三〇、〇〇〇円

累計七〇六・七〇  
金七、〇六七、〇〇〇円

〔地方の部〕一口五千円 数字は口数

(10) 平沢亀一郎、新井清、松田雄一、柳子、篠田軍治、百瀬舞太郎(5) 斎藤兵三郎(4) 尾崎徳郎、山本朋三郎(3) 丸山昭一(2) 畠中善弥、淡川舜平、山路岳夫、堤甚五郎、川北昌博、作見徹、大川博、望月雅郎、土田幸雄、久保田保雄、宮崎豊喜、平野明、湯口康雄、石橋正美、古市義孝、西沢健一(1) 望月福次、副島勝人、阿部郁夫、長谷川征夫、富田記一、山本稔、今健一、斎藤弘、国光保雄、萩千夏子、城島正幸、菅野峰夫、下谷範雄、太田義一、金成忠、藤野沢裕、小畑恵市、加藤義明、吉田光吉、小林智明、佐藤はまゑ、高木泰夫

小計 四七名 二二〇〇  
金六〇〇、〇〇〇円

累計 三、七〇一、五〇〇円  
今回の合計 一〇、七三〇、〇〇〇円  
累計 一〇、七六八、五〇〇円

申込人員 東京 三二六名  
地方 三〇九名





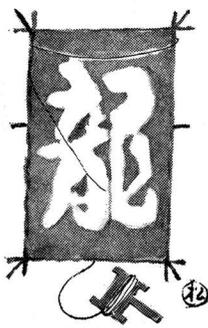
# 図書

## スイス・アルプス 風土記

宮下啓三著

面白い本が出た。面白いというより、興味のあるといったほうが適当かもしれない。ひと口にえば、スイス・アルプスのふもとに生きてきた人々の山岳観の移り変りを述べた本である。アルプスといえ、もちろんスイスだけではないが、谷が一つ違えば言葉も、風俗習慣も違うのだから、スイスだけだ、アルプスは広く、変化に富んでいる。そのスイスのアルプスが、人々の心と生活に何を投げかけ、どのように影響していたのか。これは、山の多い日本に住む私たちにとても興味ある命題だ。

この本には、華々しいアルピニズムの彩りはない。アルプスという言葉から連想する「岩と雪の王国」という雄々しさもない。だから、という誤解を招くが、面白い。今西錦司氏がかつて「山へ登るのなら、せめて柳田国男の『山の人生』ぐらいは読んでおくべきだ」と書かれたのと同じような意味で面白く、興味深い。



第一部ともいべき最初の三章は、山が恐怖の対象でしかなかった時代の、山の妖怪変化物語、つまりデモノロジーである。すでにサミヴェルにアルプス、ヒマラヤなどの民間伝承を整理・紹介した文章(エルゾググ監修「ラ・モンターニュ」収録、串田孫一訳)があるが、今度のは舞台をスイスに限定しただけに、読み通すのに多

少の困難は感じるが、紹介は細緻をきわめている。しかし、もっとも発刺としているのは、第二部に

あたる四章から八章、アルプスが

デモンの呪縛から解かれて人間の



側面に引き寄せられてくる、つまり近代精神の芽生えと成長を綿密に跡づけた部分であろう。この分野ではすでに、近藤等氏の著作「アルプス 山と人と文学」があり、併せ読むといっそう興味深い。

第三部ともいべき最後の二章は、アルプスと直接関係はないがウィルヘルム・テル伝説の考証

と、スイス山村に伝わる奇妙な「日本」の紹介である。著者は、登山、文学、民俗、歴史等を個々のものでなく、一つにまとめたものを志したというが、いずれにしても、アルプスをこのような角度から捉える本が出たと

積雪期における前穂高北尾根四峰奥又白谷側壁の初登攀は、昭和十三年一月、中央大学山岳部の永井憲治氏が、島々のガイド上条孫人とともに記録しており、その概要は、当時の「登山とスキー」誌に発表されたといわれるが公式のものではなかった。この記録は穂高岳の登山史上きわめて重要なものであるが、登山界にほとんど知られておらず、そのためこのほど特に永井氏にお願いして四十年ぶりにその手記を書いていただいたが、紙数の関係上その概略をここにまとめて発表することにした。

最初、永井、孫人の二名のほか松川友二氏ほか一名が参加する予定であったが、病気のため不参加となり二名で奥又入りをする事になった。

### 積雪期における穂高岳 奥又白谷四峰側壁の初登攀

——永井憲治氏の手記より——



一九七七年八月、白水社刊、B6判三三〇ページ、定価一二〇〇円。(大森久雄)

ヒ マ ラ ヤ

川喜田 二郎編

思い出の山々

千々岩助太郎著

故沼井鉄太郎氏は生前台湾の山にも多くの足跡を残しておられ、

朝日小事典の一冊である。文明史、地誌、歴史から現代事情、自然、探検、登山にわたる大ヒマラヤの全体像をとらえた総合文献であるとうたっている。これだけわしく、それぞれの専門家を総動員してまとめられたものは、これまででなかっただけにヒマラヤに関する百科事典として利用価値は大きい。探検・登山史年表、ヒマラヤ主要高山表、参考図書が付され、巻末に地名、人名索引とともに、地名、人名を除く主要事項を図で示した図解索引が収められているのも新しい試みであろう。

昭和五十二年七月、朝日新聞社刊、二五四ページ、定価九八〇円。(山崎安治)

また台湾山岳会の中心となって活躍されたが、本書の著者千々岩氏は沼井さんと行を共にしたことも多く、更に沼井さんの離台後は同会の機関誌「台湾山岳」の編集にたずさわり、また記録にのこる登山をされた。それらの概要は沼井さんの「台湾登山小史」(山岳34の2)でもうかがい知ることができる。その著者がかつて「台湾山岳」等に発表した紀行を纏めたのが本書である。



主な内容は「畢祿山・中央尖山・南湖大山縦走」「関山行」「大武山・霧頭山縦走」「薔葉主山連峰を往く」「秀姑巒山・ウラモン山・丹大山縦走」「大霸尖山行」「南湖大山」等で、関係図面は八葉、他に各山地里程図が七葉添付されている。現在戦前の「台湾山岳」を入手することは極めて困難であり、その点だけでも本書の価値は少なくない。台湾山岳についての貴重な文献と言えよう。ただ巻頭に挿入された十八枚の写真は、製版に原因があるのか、やや見劣りするの残念である。

一九七七年三月一日刊、七〇〇部限定、頒価二三〇〇円、A5判二二五頁横組み。(望月達夫)

縦型、横型の二種類のピトンが国産より軽く、肉厚も適当で登攀に威力を発揮した。ハンマー二本、カラビナ六個、これはいずれも在来のもの、ほかに島々製の輪かん、ラジュニス二台、高度計一個、カメラは用意しなかった。

一月十八日は素晴らしい快晴で明けた。午前六時の気温は摂氏零下二十四度である。簡単な朝食後ただちにインゼルを目指して出発、午前九時取り付きのA点に達し輪かんをアイゼンに代え、孫人がトップで登攀を開始した。ルートは大体現在の明大ルートと呼ばれているところ、風もなく、ヤッケを脱ぎたくなるほどの暖かさであった。

B点、C点、D点と大した困難もなく、ただアイゼンの爪が逆層の岩に喰い込むのと、融水がホールドを通して身体に流れてきたり、小さな雪が崩れて脅かされる程度で登攀ははかどった。E点に達したのはすでに午後三時であった。

以下永井氏の手記から――  
「D点からE点に到るクラックのトラバースがこの登攀で最も緊張した場所ではなかったろうか。巨大なオーバーハングの右側沿いに縦に走るガリーを少しつめると、右手の岩壁の上に明大小国氏らのものと思われるピトンがしっかりと打ち込まれていた。ここでガリーの上部に小規模な雪庇が突き出しているためひと息入れねばならなかった。クラックを渡るころから天候は次第に悪化してきたが、E点の上で初めて展望をほしにまにした。

二本のピトンが打たれた岩稜から四峰周辺を静かに去来するガスの切れ目に奥又のテナトが望まれる。F点の雪庇を乗り越えたと雪が降り始め、ただ四峰主稜線へ向ってぽっかり穴があいたように見えるだけとなった。F点からG点への雪面のトラバースと、G点か

らH点への雪面の直登は思ったより楽に終わり、H点に達して初めて緊張が解け、小休止を取り煙草に火をつけ少量のパンを食べた。持っていた赤い雪崩紐の一部をその岩へ巻きつけた。

登攀はいよいよ終わりに近い。雪はさらに激しく風さえ加わってきた。I点まで少し移動し、雪のナイフエッジとなった四峰主稜線のJ点へ、J点からナイフエッジを踏んで四峰の頭K点に達したのは午後五時であった。ここでザイルを外し、孫人と固い握手を交した。潤沢は灰色のガスが渦を巻いているだけで何も見えない。

四峰の頂上に長居は無用である。小憩の後暮色に追われながら、クラストした三、四のホルのルンゼを下降、テントには午後七時に帰着した。」

ザイルは三十メートルのものを用い、二十メートルのものは予備に持参したままであった。翌一月十九日は気温が上昇し、牡丹雪が降る中でテントを撤収、松高ルンゼ出合付近から雨に変わり、二十一日まで降り続けた。

「もし登攀が一日ずれていたら、私はこの雨と闘わねばならなかったであろう。」と永井氏は結んでいる。

積雪期における奥又白谷の岩壁の登攀は、ここに口火が切られたのであり、この年の三月には東京商大のパーティにより前穂高東壁がトレースされた。

なお「穂高岳登攀ルート図集」(諏訪多栄蔵著、昭和二十四年朋文堂刊)に、中大のこの登攀を永井氏の直話として一月二十六日としてあるが、これは一月十八日が正しいことを付記する。

(山崎安治)

支部だより

関西支部

● 毎月1回当支部事務局の置かれて  
いる大阪市西区靱公園内「大阪  
スポーツマンクラブ」ビルにおい  
て、定例の委員会が開催され、行  
事企画や会員相互の情報交換、懇  
談の場として利用されています。  
また、この委員会は公開制となっ  
ておりますので、委員以外の会員  
もフリーに参加して発言できるよ  
うになっています。

\*さて最近の活動ぶりは、

① 7月17日 府下高槻の奥山、  
通称ボンボン山にて会員宗実慶  
子女史を講師に、本場インドカ  
レーの作り方と食べ方ならびに  
会員石橋正美氏の指導によるワ  
インの飲み方講習会を開催。会  
員15名参加。

② 8月8日～8月21日 お盆休  
み信濃木崎湖畔の小熊山荘にて  
後立山現地集会。湖畔の静かな  
山荘をベースに白馬岳や針ノ木  
岳、小熊山登山。会員諏訪多氏  
や阿部和行氏をはじめ、家族ぐ  
るみ多数参加いたしました。

③ 9月3日 故加納一郎氏を偲  
ぶ会。土六にわか会館にて。八参  
加▽津田周二、今西錦司、水野  
祥太郎、桑原武夫、中村、富田  
田中、水野政夫、藤本、今西寿  
雄、阿部、宗実、金井(良)、  
桑田

④ 9月4日 支部保管図書の出  
干し会。(株)今西組にて今西  
支部長、阿部和行、宗実慶子、  
金井良碩、鼎、杉本、井関、下谷  
石橋、小畑、赤松、以上参加。

⑤ 9月7日 定例委員会、スポ  
ーツマンクラブ。今西支部長、  
阿部、野村、金井(健)、桑田、  
宗実、井関、鼎、杉本、石橋、

●報告とお知らせ

早池峰山

坂倉登喜子

報告

梅雨の晴間の三日間、郷土の山  
の自然保護と、秘峰和賀岳に熱情  
をかける岩手県の高橋亨夫氏のお  
誘いで、池田智津子会員の連絡を  
受け、十年振りに早池峰山に登る  
ことができた。(五二・七・一五)  
一八)

前回は岳部落から河原坊まで歩  
き、岩石の多い急坂を登って、頂  
上付近のエーデルワイスを数本見  
てきたのだったが、今のうすゆき  
山荘が前は営林署の小屋で、管理  
人がこれから監視にでかけるとこ  
ろだったので、ご苦労を聞いた。  
その折の話で、夜トラックで小  
田越え付近の植木をこっそり持ち  
帰るので困るという話があった。  
今回はその営林署の小屋が、う  
すゆき山荘という登山者の小屋に  
なっていて、利用者が大分多いよ

赤松、磯部、以上参加。  
⑥ 9月18日 和泉岩湧山ハイキ  
ング。

\*今後の予定として、11月15日に  
スポーツマンクラブにおいて、本  
部より西堀会長をお招きして、白  
瀬中尉の南極探険映画と講演会を  
企画しております。  
(関西支部・磯部幸則)

うだった。

私たちがA.C.東京会員一行は、  
高橋氏等地元山岳会の皆さんに花  
巻駅で出迎えられ、用意されたマ  
イクロパスで岳へ向い、途中の峰  
南荘(ヒュッテ)で朝食をすま  
せ、逆コースの小田越え登山口に  
向った。ところが途中の車道が崩  
壊していて、徒歩で登山口まで約  
一時間くらい登った。

道は河原坊口よりややゆるい登  
りで、岩場が始めめるころから高  
度も増し、梅雨晴れの太陽に咲き  
始めた、立派で若々しいうすゆき  
そうに対面、写真をとるためにレ  
ンズ(接写)をのぞくたびにため  
いきがでるほどの美しきで、再び  
日本の花の中で一番大きくて、立  
派な花に感激して、足が進まなか  
った。私は写真を撮ることが休憩  
と考え、ゆっくり、ゆっくり登っ  
たが、この花の原にじっと座って  
いたい思いだった。  
一行は足早に頂上に着いて昼食  
をとっておられたが、やっとおく

売場ご案内

最新入荷及び好評の本

- 中山と勲章(安川茂雄) 1,200円
- 中近代日本登山史(安川茂雄) 3,800円
- 中日本山岳遭難誌 全8巻一既刊1.穂高に祈る、2.チンネの星、3.滝谷に逝ける、4.風雪の薬師岳、5.北岳に眠る、6.谷川岳挽歌一(安川茂雄編) 各890~1,200円
- 中安政四年の蝦夷地(丸山道子) 1,280円
- 中北の山脈No.27(北海道撮影社) 600円
- 中立山路の花しるべ(巧玄出版) 980円
- 中立山路の歴史あるき(巧玄出版) 980円
- 中国立公園・白山周遊300キロ(北国文化事業団)850円
- 中快晴の山(織内信彦)2,500円
- 中山日記1978年版(日本山岳会編) 950円

茗溪堂

＜山の本の売場＞ お茶の水店 三階  
営業時間平日・午前10時30分より午後8時  
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

れて私たちが着いた時には、足の  
早い望月先輩は、もう薬師縦走に  
出発された聞きびっくりした。  
その日は下山後博物館見学など  
予定があつて、高橋氏が時間を急  
いでおられたのに、私はまた降り  
道でも花の写真を撮り撮り歩いて  
本当にご迷惑をかけてしまった。  
おかげさまで今回は若やいだ花  
の良い写真が撮れて満足してい  
る。

早池峰山のお花畑は地元の皆さ  
んの保護によって、美しい花々が  
十年たった今も立派に咲き残って  
いたのは嬉しい思いがした。  
しかしエゾノツガザクラがここ  
では珍しかったのに、三本あつた  
のが、二本は採集され、一本は登  
山道にあつて、心ない人に踏まれ  
てしまったという悲しいお話も聞  
いた。  
風雪に耐え、生き抜く花々の生  
命力を感じる時、仲間の絶えて行く  
生命のはかなさをいとおしむの  
は、早池峰を愛する郷土の方々  
と共に、山を、花を愛する私たち  
同じ自然に生きる人間の持つ心で  
はあるまいかと痛感した。

早池峰山は今夏のスイス・アル  
プス山のトレーニング山行だつた  
が、日本とスイスの花を一夏で見  
られた私は幸せ一杯であった。

婦人懇談会月例山行

駒ヶ岳・神山・早雲山

佐藤 テル

報告

昭和五十二年七月三十一日、小田原駅前より伊豆箱根バスにて九時二十分頃出発し、駒ヶ岳登山口にて下車、ただちにケーブルに乗って頂上に着く。スケートリンクの裏手より道を西北にとり、箱根の最高峰神山に向う。山はブナやヒメシャラでおおわれ、暑さを感じさせないハイキングコースを楽しみ、神山頂上近くの草原で昼食をとり、約四十分間休む。雨空を気にしながら神山の三角点前で小休止。ここより早雲山までは下り一方であるが雨上りの滑りやすい道であるためかけ降りられない。途中風穴などあり、自然クーラーと称し、ここでも腰が冷えるくらい休む。途中逆コースの小学生の遠足一行と、中年以上の婦人の単独ハイカーに会っただけで誰れにも会わない。夏のあな場であり、初心者向き四、五時間のコースとして最適である。

早雲山よりケーブルにて強羅へ、そして強羅駅よりバスにて湯本へ。大滝通りの「きよみず」に立寄り、温泉に入り、初花のおそばなどをたべ、大いに満ち足りた気分です。湯本駅にて夕方六時に解散す。

無理のない楽しい一日であった。(係)佐藤テル(参加者)市吉、藤、武田、斎藤、増田、佐藤(以上会員)、棚島、平野、安元、川井、古川(\*印は小学生)計十一名。

和賀岳

加藤 隆

報告

和賀岳、それはわたしにとって奥深く遠い山でしかなかった。それが七月十七日、岩手支部の高橋亭夫さん達の案内により、和賀岳機会を得た。

前日、早池峰山へ登り、車にて秋田県境近い、ひっそりとした湯田温泉に泊る。四時過ぎに目が覚める。前日の疲れがでてぐっすり眠った。六時出発、今日も好天気をお願いながら、車は真昼林道を秋田県側へと向う。途中林道の真中に、赤牛が数頭歩いており、われわれの目を楽しませてくれた。

県境の峠にて朝食をとる。ここで初めて穏やかな山波の中に和賀岳を見る。秋田県に入り、真木溪谷沿いの道となる。マタギ小屋跡にて車から開放される。この和賀岳でもいまだに熊を捕っている人々がいるようで、マタギ小屋跡近くにプレハブ作りの立派な小屋があり、入口の木の板に、現代的にハンター小屋と書かれており、皆大笑いとなる。

・図書受入報告(2)

出版社寄贈単行本(昭和50・7~52・7)

- (1)キングドン・ウォード著 倉知敬訳『青いケシの国』ヒマラヤ<人と辺境>3 白水社 昭50
- (2)スネルグロープ著 吉永定雄訳『ヒマラヤ巡礼』ヒマラヤ<人と辺境>5 白水社 昭50
- (3)ショーンバーク著 雁部貞夫訳『異教徒と氷河一チトラール紀行』ヒマラヤ<人と辺境>4 白水社 昭50
- (4)スウィンソン著 松月久左訳『国境のかなたー大探検家ベリイの生涯』ヒマラヤ<人と辺境>2 白水社 昭50
- (5)モーガン著 吉沢一郎訳『幻の探検家ネイ・イライアス』ヒマラヤ<人と辺境>1 白水社 昭51
- (6)岐阜山岳連盟編『ぎふ百山』岐阜日新新聞社 昭50
- (7)山と溪谷社編写真集『世界の山』山と溪谷社 昭50
- (8)真仁田美智子編『エベレスト日本女子登山隊報告書 一九七五年』女子登攀クラブ 昭50
- (9)岩橋崇至/写真『名峰シリーズ4 谷川岳』山と溪谷社 昭50
- (10)白旗史郎著『名峰シリーズ2 北岳』山と溪谷社 昭50
- (11)日本山岳写真集団/写真『名峰シリーズ3 剣岳』山と溪谷社 昭50
- (12)水越武/写真『名峰シリーズ1 槍・穂高』山と溪谷社 昭50
- (13)松方三郎著『山で会った人』築地書館 昭50
- (14)松方三郎著『山を楽しもう』築地書館 昭50
- (15)松方三郎著『アルプスと人』築地書館 昭51
- (16)松方三郎著『民芸・絵・読書』築地書館 昭51
- (17)松方三郎著『手紙の遠足』築地書館 昭50
- (18)ジェイムス・グレイナー著 吉富享訳『アラスカの山岳飛行士ドン・シュルドンの生涯・風に賭ける』山と溪谷社 昭50
- (19)近藤等著/写真『近藤等写真集 アルプス岩と氷の王国』小学館 昭50
- (20)日本山岳会編『山日記・昭和五十一年版』茗溪堂 昭50
- (21)ロペール・バラゴ ヤニック・セニユール著 小野尚俊訳

- 『マカルー西稜』山と溪谷社 昭50
- 22ライnholt・メスナー著 横川文男訳『第七級極限の登攀・その技術・トレーニング・体験』山と溪谷社 昭51
- 23原武著『北壁に死す・原武遺稿集』山と溪谷社 昭51
- 24シプトン著 田村協子訳『嵐の大地—バタゴニア探検一九五八~六二年』山と溪谷社 昭48
- 25渡辺公平著『山は満員』茗溪堂 昭50
- 26日本山岳協会編『山岳手帳 昭和51年版』日本山岳協会 昭51
- 27上田哲農著『上田哲農の山』山と溪谷社 昭49
- 28京都大学学士山岳会編『ヤルンカン』朝日新聞社 昭50
- 29渡辺八郎著『渡辺八郎先生遺芳録』渡辺八郎先生遺芳録刊行会 昭50
- 30~33山形県学術調査会編『朝日連峰総合学術調査報告』昭39『吾妻連峰総合学術調査報告』昭41『飯豊連峰総合学術調査報告』昭45『出羽三山・葉山総合学術調査報告』昭50
- 34G・レビュファ著 近藤等訳『モンブラン山群・特選一〇〇コース』山と溪谷社 昭49
- 35G・レビュファ著 近藤等訳『ゼ克蘭山群・特選一〇〇コース』山と溪谷社 昭50
- 36川喜田二郎著『The Hill Mogars and their Neighbours III』東海大学出版局 昭49
- 37高頭式編『日本山嶽志』覆刻版 大修館 昭50
- 38島田巽著『山・人・本』茗溪堂 昭51
- 39一原有徳著『あのころの山』北海道撮影社 昭51
- 40今西錦司著『大興安嶺探検』講談社 昭50
- 41日本山岳会『会報1~100号』大修館 昭50
- 42富山県教職員山岳研究会編『とやま百川』北日本新聞社 昭51
- 43栗林一路著『ヒマラヤ遠征・トレッキング入門』成美堂 昭51
- 44~49四季書館編『新編・日本山岳名著全集11』『同・4』『同・9』『同・2』『同・8』『同・12』三笠書房 昭51・52
- 50川口邦雄著『山の道具手帳』山と溪谷社 昭51

(以下次号)

ここで水を補給し、いよいよ和賀岳へと向う。うっそうとした味わい深いブナの原生林に入り、フキの葉を日がさ替わりしながら二時間ほど行くと、森林限界へ出る。和賀岳へ続く薬師岳が頭上に見え、南へ続く国境山稜に真昼岳が見える。薬師岳山頂へ飛びだすと和賀岳が堂々としていて、想像していた通りなのでうれしくなる。和賀岳へ向う稜線は高山植物の満開で、お花畑はわたし専用の敷ぶとん、歩いてはねころび、歩いてはねころびといった具合で、実に満足感一杯である。

和賀岳までは穏やかな稜線をのんびりと歩く。頂上直下、わたし一人緑のササをかきわけ、だれもない和賀岳山頂に立つ。皆が来るまで頂上の草地にねころび、ワインを飲みながら静かな東北の山を楽しんだ。

三時頃、空模様がおかしくなり早々に出発、和賀岳を振りかえりながら下る。和賀川の渡河後、雨と雷との付録が付き、マイクロボスの待っている赤沢林道へと下った。

### 忘年会

お知らせ

日時 12月7日(水) 18時から  
場所 日本山岳会会室  
会費 一〇〇〇円

師走忘年会酒山の話と、こうなります。飲み狂い、話し狂

い、酔い狂おうではありませんか!! 恒例のプレゼント交換(三〇〇円以内の品で手紙を添えて)品物がありましたらお持ち寄りください。現在のルームでの忘年会は最後になりますので、皆様ぜひご参加ください。  
(主催)集委員会・婦人懇談会  
お知らせ

### スキー懇親会

今冬も恒例の集委員会主催のスキー懇親会を下記スケジュールにて開催いたします。  
人員に限りがありますので、早目にお申込みください。なお、十五日には唐松岳登頂を計画しております。ご希望の方は、その旨ご連絡ください。

期日 昭和53年1月14日~16日  
場所 八方尾根中大山荘  
定員 30名  
費用 会員八〇〇〇円、一般一万円

申込み期限 申込み金をそえて、12月20日までにルームまで。  
(集委員会・担当若本和夫、加藤隆、藤本敏行)

### 王室オランダ山岳協会 住所変更

お知らせ

王室オランダ山岳協会は、去る6月6日より下記の住所に変更しましたのでお知らせ申し上げます。  
"KONINKLIJKE NEDERLANDSE ALPEN-VERENIGING"  
(王隣オランダ山岳協会)  
住所 LANGE VOORHOUT 16  
S-GRAVENHAGE THE HAAG  
電話 070165、78、50  
(海外連絡委員会)

お知らせ

NDSE-ALPEN-VERENIGING  
(王隣オランダ山岳協会)  
住所 LANGE VOORHOUT 16  
S-GRAVENHAGE THE HAAG  
電話 070165、78、50  
(海外連絡委員会)



### 会務報告

#### 9月理事会

(9月12日午後6時30分、本会ルーム)

出席者 西堀会長、望月、折井各副会長、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、大森(久)、鈴木、黒石、田村、浅田各理事、浜野、山崎、金坂、松丸、近藤、小原各評議員  
委任 山本、越田、牧野内各理事、飯野監事  
▽議案  
UIAA総会出席者の件 (宮下)  
吉沢一郎氏に願ひする。承認  
明治大学アンナプルナ南峰登山隊(一九七八年)推薦状交付の件 (橋本) 承認

熊本支部20周年記念行事に本部役員派遣の件 (宮下)  
望月副会長長出席 了承  
▽報告事項  
ルーム基金募金の件 (望月)  
法人関係に対する募金を近日中に開始  
福島支部長伊藤弥十郎氏9月7日死去、9月10日葬儀に山崎評議員本部より出席 (宮下)  
明治大学ヒマルチュリ登山計画中止 (橋本)  
高所登山 (田村)  
「中央アジアの高峰」の印税一部をルーム基金に寄付  
ガルワール遠征9月23日出発 (鈴木)  
自然保護 (鈴木)  
白又川谷林道建設中止要望書を奈良県知事と環境庁自然保護局長宛に提出  
山研 (小倉)  
ペンキ塗りかえ完了  
会員の一部に山研利用でマナーの悪い者がいるが、注意を喚起する (黒石)  
婦人懇談会 (黒石)  
ビールパーティーの収入よりルーム基金に寄付 (浅田)  
青年懇談会 (浅田)  
ドイツとの交流登山より隊員帰国、9月10日~11日に日光で報告会開催 (中川)  
7月13日 映画会・講演会盛會  
9月10日 藤島玄氏の話聞く  
会開催

今後の予定 10月に写真の講演、10月29日JACノミの市、12月中旬もちつき大会、1月中旬スキー(八方尾根) (近藤)  
山岳 71・72年号大部分入稿 (近藤)  
日本の山岳名著第2期について (近藤)  
20点29冊決定、来年4月刊行予定  
遭難対策 (金坂)  
9月16日よりナダレ研究会開始  
10月17日雪氷学会でナダレ懇談会開催 (山崎)  
図書 絵画展は今回は中止  
この一本展12月3日、出展締切11月10日

#### 10月理事会

(10月11日午後6時30分 本会ルーム)

出席者 西堀会長、望月、折井各副会長、宮下、高遠、山本、中川、橋本、鈴木、大森(久)、黒石、越田、田村、牧野内各理事、浜野、山崎、金坂、松丸、近藤、小原各評議員  
委任 小倉、大森(久)、嵯峨野、浅田各理事、飯野監事  
▽議案  
第二次RCCカラコルム登山隊一九七八推薦状交付の件 (説明 須田義信) 承認

#### 報告

・予算執行状況中間報告(山本)  
 ・UIAA総会に出席のため吉沢一郎氏出発(10月10日)

・山研 (宮下)  
 (折井)  
 山研の土地使用許可延長される、山研利用状況は予定通り、山研の塗装工事終了

・高所登山 (田村)  
 ガルワル登山隊タルコットに登頂の報入る、帰国後、集會委と合同で報告会開催の予定

・図書 (越田)  
 10月22日 図書交換会  
 12月3日 この一本展

・婦人懇談会 (黒石)  
 12月7日 ルームで忘年会  
 ・学生指導 (牧野内)  
 学生部年報6号11月発行予定

・ルーム募金 (望月)  
 10月11日現在応募  
 金一〇、七四八、五〇〇円  
 申込人員 東京地区 三二六名  
 地方 三〇九名

ルーム日誌 (52年9月)

6日(火) 山研委員会  
 7日(水) 遭難対策委員会  
 10日(土) 藤島玄さんと語る会  
 12日(月) 理事会  
 14日(水) 自然保護委員会  
 16日(金) 雪崩研究会  
 20日(火) 図書委員会、募金委員会  
 21日(水) 三水会

22日(木) アラスカ・カナダ旅行交歓会  
 29日(木) 稲門山岳会  
 今月の来室者 三七八名

会員移動  
 物故者  
 七二六五 岡本 俊彦(52・5届  
 出・9月)  
 一一一三 伊藤 弥十郎(52・9・6)

六四二七 三好 勝彦(52・9・6)  
 退会者  
 六一一七 小野 敏之(52・9・6)  
 七六六〇 白井 厚子(52・9・6)

七五六二 法政大学二部体育会山岳部(52・9・17)  
 六三三三 さがみの会(52・9・26)  
 除籍取消  
 五八一九 明石 貴雄(52・9・19)  
 終身会員  
 四二二二 清水 悟郎(52・9・20)

年次晩餐会をお忘れなく  
 本年の年次晩餐会は、すでに会員各位にお知らせしましたとおり12月3日(土)午後6時から、東京新宿の京王プラザホテルです。お誘い合せのうえご来会下さい。

ネパール・チャリティーカレンダー  
 会員今井友之助氏の提供によりヒマラヤのカレンダーができました。一九七八年版12ヵ月のもので、一部一〇〇〇円です。カレンダーの中から希望の一枚を指定すれば、四ツ切写真に引伸して進呈いたします(カレンダーとも一万円)。

この売上金額は、必要経費を除き、日本山岳会、日本ネパール協会、国際ロータリー等の協力のもとに、ネパール・チャリティー資金などに活用されます。申込締切りは12月末日、ご趣旨にご賛同のうえ、お早目に当会事務局までお申込みください。

追悼  
 安川茂雄氏(会員番号二四一八)は、十月二十三日、食道ガンに肺炎を併発、逝去されました。「谷川岳研究」、小説「霧の山」、「近代日本登山史」その他、登攀と執筆に多彩な活動をされた氏のご冥福をお祈り致します。

昭和五十二年十一月二十日発行  
 113 東京都文京区湯島一六六一  
 利根川商事株式会社ビル  
 発行所 社団法人 日本山岳会  
 発行者 西堀栄三郎  
 編集代表 大森久雄  
 (813)三二八六(代表)  
 振替口座東京三二四八二九番  
 東京都港区赤坂一丁目三番六号  
 株式会社 技報社

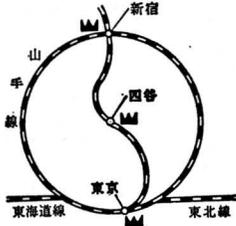
印刷所

登山・スキー用具専門店

# 山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101  
TEL. 06(362)5736

- 買いやすい  
山の店
- 北へ来たら  
山の店
- フレッシュな  
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地  
TEL (351) 7432-1912  
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五  
TEL (271) 1560-8575  
新宿店 新宿ステーションビル四階  
サービスショップ  
TEL (352) 65664  
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

# 片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9  
片桐 盛之助  
電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも  
持たない方がいい  
けどもし、どうもし  
要するものがある、  
なにしろ人間ですから  
たして登山ですから  
どうしても必要なもの  
をこころえ売ります  
ま責任はもっています

かたるびンテイ  
でん中 281-8456  
中央区八重洲4の1

## 香山荘

登山とスキー具

# イワタ

東京都中央区日本橋通2-1  
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

# 好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031  
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店  
大阪店・北区豊船町上1丁目4-7 (364) 0933 (代)  
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



山の新刊

## 1978年版 山日記

日本山岳会編 A6ポケット判 定価950円

## 快晴の山

織内信彦 A5判338頁 定価2,500円

「山日記」は、できるだけ広い範囲の登山者を利用して頂くよう編纂され、殊に若い世代の人々に一人でも多く活用して貰うよう企画されています。山党同志の洒落た贈物として喜ばれています。プレゼントカード付

登山のために「山日記」の効用：  
織内信彦／山の装備：堀田弘司／山の気象：大井正一／山の医療：中島道郎

登山便覧／山小屋一覽／登山行程表／交通機関連絡先一覽／難読山名／日本三百名山／登山地図・案内書／五万分の一・二十万分の一地形図一覽／剣岳と谷川岳の登山規制条例／山岳保険について／日本山岳会本部支部一覽

彼は氷ノ山以来五年間十幾つ山の行が、みな好天に恵まれたというから誠に幸運な天気男と言えるだろう。「回想の山々」「人と本」「海外紀行」などに就いてもゆつくり読ませてもらう事を楽しみにしている。(三田幸夫)

快晴の山抄／氷ノ山／浅草岳／やびつ峠／冬の那須岳／犬越路／長尾峠、金時山／新緑の金山平と十文字峠／至仏山から檜枝岐へ／他回想の山々／回想の谷川岳／黒部の冬／ちかごろあるいた三つの谷／ある日ネパールの旅を憶う／他人と本／ウエストンの書簡と先駆者たち／「山に忘れたパイプ」を読む／踏跡第四号／この一本／他海外紀行／ロッキの旅／タッコイラの旅／アフガニスタン紀行